

大学での研究シーズを活用した共創的ワークショップの展開の一考察 -光科学を中心とした高大連携の取り組みから-

有廣 悠乃

徳島大学 研究産学連携部地域産業創生事業推進課

1. はじめに

徳島大学は、現在光科学を中心として、学内の研究シーズを活用した地域共創を目指し、対話型ワークショップを展開している。学内にて、この対話型ワークショップを展開する契機となった背景として、内閣府事業「次世代ひかりトクシマ」が採択されたことに起因する。採択後から、徳島大学が光科学を中心として地域との共創を生み出すために、産学連携の取り組みの一つとして事業を実施している。また、学内の光科学研究所であるポストLEDフォトリソグラフィ研究所(以下、pLED)は、次世代の光科学分野の研究者の育成を目指している。これらの流れを受け、研究者育成や高大連携などの視点などから、徳島県内の高校生が、本学の研究シーズを活用して自分で学びを深めるワークショップを年間通じて複数回実施している。本発表では、学内の研究シーズを活用し、高校生をはじめとした地域との交流を通じ、関係性構築を基盤とした共創の在り方の一考察を論じたい。

2. 高大連携の取り組みと流れ

高大連携の本取り組みが立ち上がった背景としては、pLEDの教員自ら高校などに出向いて行われる出前講義やサイエンスカフェなどが契機となっている。従来のサイエンスカフェや出前講義は、光科学の面白さや楽しさを高校生に伝えるものであり、pLEDの教員がそれぞれの研究分野に関する知識や技術の内容の講義を行っていた。さらに、今年度から、ワークショップ等の手法を用いて、高校生自ら思考してアイデアを考え、相手に自分のアイデアを伝えるワークショップを展開している。さらに、来年度以降は県内の地域の方と交えた対話を通して、高

校生と地域の方々とアイデアやプロジェクト、新しい考えや価値観などを創発する展開を検討している。

CO.TOKUSHIMA 未来の光研究者と共創PJ

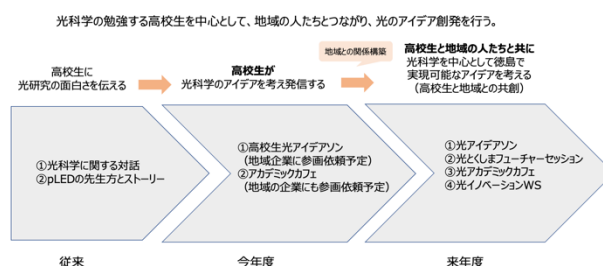


図1：経年の取り組み（筆者作成）

3. ワークショップの意義

海外におけるワークショップの潮流としては、ベトナム戦争などに反対する平和運動、北欧をはじめとするヨーロッパの環境教育が契機として挙げられる。また、日本においては東京世田谷区のまちづくりの活動が起点となり、住民主体を重視した対話型のワークショップの広がりを見せた。

これらの社会的な動きの中で、中心的に活動していた中野(2001)は、ワークショップを「講義などの一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学び合ったり創り出したりする学びと創造のスタイル」と定義している。

また、日本ファシリテーション協会の堀公俊と加藤彰(2008)は、「主体的に参加したメンバーが協働体験を通じて創造と学習を生み出す場」と定義をしている。

これらからワークショップは簡単に述べると「参加者による体験的な活動に基づいた共同の学び」と言えるだろう。またこの前提から、光科学の技術、それを支える研究の最前線や研究

者のキャリアなどを高校生が聞き、大学関係者と交流体験することにより、高校生の学びにつながると思われる。

4. ワークショップの概要

今年度のワークショップを企画にするにあたり、テーマを「キャリアと科学」とした。徳島大学光科学研究の教員のキャリア、そして光科学を学ぶ大学生のキャリアから、高校生が光科学に興味を持つことを狙いとしてワークショップの設計をした。教員のインプットトークはグラフィックレコーディングにより記録を行い、参加者から共感したポイントにシールを貼っていただき、参加者の関心のポイントを明確にする目的とした。以下概要である。

【開催日時】

2022年某日 13:00～17:00

【参加者】

参加者：34名

(うち高校生15名、徳島大学生13名、高校教員2名、大学教員：4名)

【開催方法】

方法：対面ワークショップ

【当日の流れ】

13:00 開会の挨拶と会の説明
 13:10 チェックイン
 13:20 アイスブレイク
 13:40 ストーリーテリング
 14:10 インプットトーク
 15:10 スモールトーク
 15:30 休憩
 15:45 マグネットテーブル
 16:30 チェックアウト
 16:40 会の振り返り
 16:40 閉会の挨拶

5. ワークショップから見た結果

pLEDの教員のインプットトークやグループワークを経て、高校生が印象を持ったポイントとしては、大学教員の経験に基づく価値観などに対し

て多くシールが貼られている。また、研究を進める上での喜びや苦勞などに対しても、シールが貼られている。時間の関係上、大学教員の研究の内容は少なかったが、教員の経験や考え方に印象が残ったと考えられる。

また、ワークショップを通じて、高校生には光研究の面白さや可能性を身近なものに感じてもらうとともに、キャリアと科学、キャリアと研究について考えるきっかけを作ることができたとと言えるだろう。(図2)

このワークショップを通じて、光技術や大学での学びに興味を持ちましたか？
 32件の回答

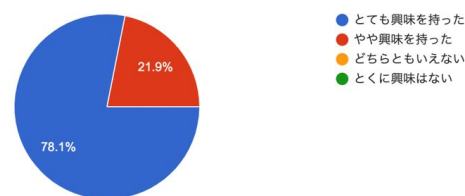


図2：開催後のアンケートより筆者作成

そして、徳島大学が推進しているワークショップやファシリテーションを通じた協働、共創、イノベーション創出を、徳島県内の高校の先生方を対象に体験していただいたと考えている。

6. 考察とまとめ

地域共創を目指すにあたり、キャリアに関する高大連携のワークショップを展開することは、将来の徳島県を担う地域人材の育成にもつながる。また、地域と関係性を築き、大学の研究シーズやナレッジを提供し協働することは、高校生や大学生が県内で活躍する土壌を耕すことにつながる。学生のみならず、大学を中心とした地域との関係性を紡ぐことは、多様な人との価値観や考えに興味を持ち、受け入れることにつながるだろうと考える。

【参考文献】

中野民夫 (2001) 『ワークショップ』 岩波新書
 堀公俊・加藤彰 (2008) 『ワークショップ・デザイン』 日本経済新聞社